

中国書道史（秦・漢）を学ぶために

岡村浩

序

新潟大学書道科の漢字実習のカリキュラムの骨子は、「漢字実習Ⅰ」において楷書、「漢字実習Ⅱ」では行書、「漢字実習Ⅲ」は草書を、「漢字実習Ⅳ」では篆書・隸書について代表的な古典を取り上げ、臨書を中心とした学習を行う。このうち私が担当しているのは「漢字実習Ⅳ」である。臨書を通して二体の基本的な用筆法を習得し、鑑賞眼を養い、そして関連する歴史資料への認識を深めるところを学習目標の支柱と定めている。

講義計画を略述すると、

- 一、秦漢書道史 時代背景について
- 二、曹全碑・張遷碑の臨書
- 三、禮器碑・石鼓文の臨書
- 四、石門頌・木簡の臨書

である。評価方法は主に半紙の提出物による。二から四まで、一年間に三回の作品提出となる。

曹全碑（一一八五）と張遷碑（一一八六）とは、わずか一年違いの紀年ながら碑面に窺う書風はまったく異なる。つまりこれを併習することにより、漢碑の書風が多様で一碑一面貌といわれる所以を理解させる狙いがある。

三、では八分書の総括として禮器碑を取り上げる。篆書古典では、文字数が多い刻石の最古の類に属す石鼓文を学習する。その際、点

画が不明瞭な箇所を理解を得るために清代・呉昌碩の臨書した石鼓文を併習する。

四、の課題では比較的質朴な書風で古隸の一派に分類されることが多い石門頌を学び、八分書とは別趣の原始的な美に触れ、一方木簡では肉筆が吐露する漢人の息吹を看取することを学習目標とする。上記の内容に沿って講義を行う際、学生が周知する関係資料が非常に狭く乏しいことが毎年のことながら問題点として挙げられる。市販の所謂「法帖」が底本として用いる原拓には、各出版社によって精粗がみられ、中には佳拓といえないものを仕上りのよくないオフセット印刷によって影印した、手習いには不向きな図書を刊行、普及させている例も、けっして少くはない。ただしそのような例も、

使用目的によっては資料として活用できる場合もあるわけである。講義で取り扱う六種の古典は、何れも高等学校芸術科「書道」の教科書中、頻繁に登場するものばかりといえる。卒業後のことを考えても、これらに関する基本的な参考図書・工具書類の知識は必須のものとなつてこよう。また、古典の背景に流れる書道史の大綱を把握しなければならぬことはいうまでもない。

本稿では、中国書道史におけるとくに秦・漢代につき、最低限の事項を概述し、そして使用頻度の高い図書・工具書の紹介を行う。これが書道科教材研究の一端に資するものになれば幸いである。なお紹介資料は、本学の図書館、研究室、教員個人の蔵書等から選び、学生が実際に過眼することが可能なものを主として列記した。

秦代の概観

周王室が末期症状を呈した戦国時代、秦は元来西方遊牧民族の一つだったが、徐々に勢力を拡張して周末には楚・燕・斉・韓・魏・趙と並び七雄となる。前二二一年、ついには戦国の世を平らげた人物・趙政は自ら「始皇帝」と号し、都を咸陽（陝西省）に定め、中国史上初の統一国家の舵取りを行った。

始皇帝がふり降ろした改革の大ナタは、それまで各国ごとに行われた政策や制度を自国のものに統廃合することであった。主たるは①周代の封建制度を廃し、皇帝を頂点とする官僚制による中央集権国家の樹立。②諸子百家・異論者を排する焚書坑儒にみる思想統制。③度・量・衡の標準器の制定。④使用文字の統一、制限等である。

文字の統一

後漢の許慎（生没年不詳）が著した最古の字書『説文解字』（二〇〇年に完成）の後叙に

秦の始皇帝、初めて天下を兼ねぬ。丞相李斯、乃ち奏して之を同じくし、其の秦文と合せざる者を罷む。斯は倉頡篇を作り、中車府令趙高は爰歴篇を作り、大史令胡毋敬は博学篇を作る。皆な史籀の大篆を取り、或いは頗る省改す。所謂小篆なる者なり。

といい、自国の文字を基準にし、他国の文字を廃した経緯の一部がみえる。ここで、前代の文字を整理した小篆（秦篆）が登場するわけである。なお『説文解字』の読解を助ける参考文献として、『中国書論大系』（第一巻・二玄社刊）に福本雅一氏の訳文がある。

秦漢時代の石刻に関する題跋、新出石刻資料をまとめたものでは、『楊殿珣編『石刻題跋索引』（商務印書館、一九四一年、『石刻資料新編』一—三〇所収）

②気賀澤保規「中国新出石刻関係資料目録」（『書論』第十八・二十・二二・二五号所収）

があり②は引き続き『富山大学教養部紀要』（二四—二）、『明治大学人文科学研究所紀要』（第四一冊）に連載されている。

秦の七石・秦篆の代表例

天下統一後、前二一九より前二二一年にかけて始皇帝は東方新領地の他、全国を巡幸し権威を誇示する文を石に刻ませ山々に建てた。

- ①嶧山刻石（前二一九）山東省兗州
- ②泰山刻石（前二一九）山東省泰安
- ③琅琊台刻石（前二一九）山東省諸城
- ④之罘刻石（前二一八）山東省福山
- ⑤東觀刻石（不詳）山東省福山
- ⑥碣石刻石（前二一五）河北省黎県
- ⑦会稽刻石（前二一〇）浙江省紹興

これらの書者は丞相（宰相）・李斯（？）前二一〇）といわれる。辛い、残石ながら泰山の泰廟内に②が、また北京の歴史博物館内に③の残石が伝世し、文献資料中で曖昧な小篆の典範の一端が窺える。縦画を柱とし長脚をとくにみせる縦長の姿態、曲線を用いた丁寧な処理した転折部、筆圧を殆ど変化させず重厚に仕上げた線質や、左右相称の均衡美から、筆者が皇帝の威厳を金石に刻み留め、世に知らしめ残そうとした謹直な姿勢が観察される。

刻石中の実用書

それに比べてこの時代の権量銘の書には、タッチの遅速・緩急の変化による線の太細や起筆終筆部の多様性が全体に感じられる。刻銘が多く鑄銘は少いという。銘文の決まり文句にも、始皇帝とそれ

に二世皇帝の発した詔を追記した二種がある。陶製で銘文を四字ずつ型押しした器も存在する。別に、詔版も作られた。

総じてこれらには、硬質に刻入するゆえの直線化や陶器に型押しした豊肥な線質のもの、大量製産上、転折部や点画の接合部での不即不離の間の取り方から生じる草率感を覚える。一様にみえる石刻の厳肅さに対して開放的な姿態のものがあることは、秦国文字の定着化は一応成功したようだが、一方では早くも書写の用途の如何により書体・書風の分化が進んでいた表れでもあろう。

新出・日常の肉筆資料

一九七五年に湖北省雲夢睡虎地第十一号墓より発見された一一〇〇余りの竹簡より、秦代の日常筆写体の存在がクローズアップされるようになった。筆写内容の大半は秦始皇帝時代の法律文書で、一部には年譜の如き「編年記」も含まれている。漢代の竹簡や帛書と比較して、これを後世の隸書に属する書体が混在しているとみる向きが強い。隸書の起源や変遷を窺う貴重な資料として扱われ、とくに「秦隸」と呼ばれることもある。

ところで先の『説文解字』の紋には、秦に八体があったという。その大半が用途による呼び分けだが、書体の名としては「隸書」が含まれている。同書には「……大いに吏卒を発し官獄の職務繁なり。初めて隸書有りて、以て約易に趣き、而して古文は此れ由り絶えぬ。」とも記している。約易とは早書きのために簡略化に向かう意で、通俗的だと思われる文献上の記述を裏付ける資料の登場をみたわけである。

主な参考文献

① 国家計量総局主編『中国古代度量衡図集』（文物出版社、一九八

一年。翻訳・みすず書房）

② 『書論』第二五号「秦の刻石」（書論編集室、一九八九年）

③ 「秦の始皇帝とその時代展」（世田谷美術館、日本放送協会等、一九九四年）

④ 『秦漢金文彙編』（上海書店、一九九七年）

⑤ ②は文字通り金石文に絞った内容で、③は同標題で開催された特別展観の図録。次いで肉筆資料については、

⑤ 「雲夢睡虎地秦簡概述」（『文物』一九七六年第六期）

⑥ 睡虎地秦墓竹簡・整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社、一九七六年）

があり、⑤は最初期の報告書で以降何度か関連の論文が『文物』にみえる。⑥は原寸大影印本で一帙七冊から成る。日本の研究成果では

⑦ 『書品』二七二号「睡虎地秦墓竹簡」（東洋書道協会、一九八三年）

⑧ 永田英正著『居延漢簡の研究』附篇「雲夢秦簡の発見と中国の研究」（同朋舎、一九八九年）

⑨ 『書道研究』「秦漢の肉筆の研究」（美術新聞社、一九九〇—三）にまとまった論考が掲載されている。

これら肉筆のみならず、書体の変遷や職官制の変遷を窺う資料として、近年一〇〇〇点を超える秦代の封泥（注1）が発見され、学会の注目を集めている。最新の情報、研究成果を

⑩ 「新発見秦封泥研究論文集」（『西北大学学报』哲学社会科学版、一九九七年第一期）

に報告しているので参照されたい。

漢代の概観

秦国は二代十五年で崩壊し、次代の為政者は項羽と覇を競った劉

邦（前二四七～前一九五）が帝位に就き、高祖に推され、四百年以上続く中国最長の王室が誕生した。ひと口に漢といっても前漢（前二〇六～八）、後漢（二五～二二〇）に分かれ、また間には短命ながら新国が存在した。前漢は都を長安（現・西安）に、後漢は洛陽に定めたので、各々を西漢・東漢とも呼んだ。

前漢には前代の延長線上にある書体・書風の簡牘や帛書等肉筆資料が豊富で、石刻類が少い。それが後漢に入ると反対に、石刻に多様な書式、書体、書風が目立ち、立碑が流行する。横画に波状の裝飾的表現、波磔を加味した八分書は、既に前漢の木簡に完成された姿を示すが、その刻石上での定着および極限美を示す程の進展は、後漢期においてみられる。一方、石質や地域性により波勢（波磔）をもたない素朴な風趣もみられ、別に古隸と称す。

前漢の刻石

現存するものでまとまった銘文を有する例は僅少である。①群臣上酹刻石②魯靈光殿址刻石③霍去病墓刻石（二種）④甘泉山刻石（広陵中殿刻石）⑤楊量買山記⑥魯孝王刻石（五鳳二年刻石）⑦庶孝禹刻石⑧九龍山封門刻石等を挙げる。⑤から⑧は篆書の遺風も認められるがどちらかといえば、隸書に属す。他は隸書の筆法も混在した篆書。建築材に付刻したもの、用途不明の刻字もある。⑤⑥は風格を有する逸品で臨書の対象にもされる。

新の刻石

王莽が建国主の新は、短期間ながら見落とせない存在である。先の『説文解字』にこの国で用いた「六書」を多くに列記している程である。主に用途別に文字の呼称を記したもののだが、それだけ文字を使用する舞台が拡がったわけである。

刻石には①居撰墳壇刻石（二種）②萊子侯刻石③金郷県出土残石④鬱平大尹君孺久慕題記（二種）等が知られる。わざと手間のかかる裝飾的な篆書（總篆風）を用いた①④や、②③のように肉筆資料で全盛を迎えていた八分を施さない古隸風がみられることなどから、この時代のモードを復古調と捉える説がある。

前漢と新の刻石については、
○徐森玉「西漢石刻文字初探」（『文物』一九六四年五期所収）に代表的遺例の紹介がみられる。

後漢の刻石

漢碑では碑文末部に、孔宙碑（二六四）は「嘉石を采り銘を勒して後に示し」「永く不刊を矢い億載声を揚げん」（「不刊とは摩滅しないの意」、張遷碑（一八六）では「是に於て石に刊し表を豎て、銘は萬載に勒せらる」等とあり、当時佳石を選び銘文を永遠に遺そうと立碑した様子が凝縮されている。

立碑がとくに盛んになったのは、桓帝（在位一四六～一六七）と次の霊帝（在位一六八～一八九）の治世で、完成された八分体の名品が登場する。しかも一碑一面貌と称賛される。これら多面的な現存漢碑の書風の分類につき、先人の言では

朱彝尊（一六二九～一七〇九）方整、流麗、奇古（西嶽華山廟碑・宋拓「長垣本」跋文・注2）

王澐（一六六八～一七四三）雄古、渾勁、方整（『虚舟題跋』禮器碑の条）古雅、方整、清瘦（『竹雲題跋』）

康有為（一八五八～一九二七）は駿爽、疎宕、高渾、豊茂、華艶、虚和、擬整、秀韻（『広芸舟双楫』本漢第七）

を挙げる等、様々な評語が用いられ、興味深い。邦人でもこの種の区分は先行文献に散見するが、中では浦野俊則氏「漢碑の分類と書風」（『不手非止』六号所収）に、製作目的による碑刻の分類法と

して、(一)神格の靈験を頌するもの(二)祖廟の祭祀や修造を述べるもの(三)個人の徳行を頌するもの(四)土木事業の完成を記念するもの(五)その他のもので項目を挙げて碑刻をあてはめ、書風上の特徴を記述している。

そもそも後漢の立碑の流行とは、私的な理由による建立の増大である。文字が神のものから官権の象徴を通り抜け、人間のものへと移行する過程を示しているともいえよう。他、石刻の形状や性質から、碑・碣・摩崖・墓碑・石闕・画像石・瓦當文・博文等による分類も出来よう。金石資料では璽印も見逃せない。

一画弩張体

唐・孫過庭の著した「書譜」の第二篇に「夫の懸針垂露の異……」とある。縦画の抜き方には充分気を配つたらしい。懸針とは縦画の筆端をまっすぐに引き、或いは止め、垂露は露の滴の如く縦画の終筆が下に膨らんだ形状をいう。竹木簡類に競い合うように変化多端な多量の遺例がみられるのに対し、刻石では実に少い。通行体では気楽に用いたが、改まった書きぶりのときには、それなりの表現理由が存在したようである。

①魯孝王刻石(前五六) 山東省曲阜孔廟碑林

全文三行十三字中、首行と二行末の二つの「年」字の縦画を繰り返しのばす。木簡中「年」字は確かに頻繁に強調画を盛り込んでいるが、のばしていない字もまた多い。のばした文字の配置が問題で、多分に行末や文の句切れ目で大胆なアクセントを加えている。この刻石の場合も、配字から察して全体の調和を狙い、簡牘で盛んだった垂脚の筆法を移入したとみる方が穏当だろう。筆端が垂直に引かれているのが、大半の木簡との違いだが、またこの縦画のみに目立つ太細の変化は、肉筆資料を想起する要素ともいえる。

②祀三公山碑(一一七) 河北省元氏県

全体は十行、行十四字から二十三字と不揃いな字詰めになっている。それだけに各文字の背丈が異なる。「寧」「延」「焉」字等に下垂筆がみられ、篆書の文字構造が色濃い。ただし篆書の長脚体を模倣しようとしたのみならず、模様のように錯綜した全体観からかかんがえると、単調さや息苦しさを打ち破るため臨機応変に草した筆者のセンスも感じられる。冒頭の「(元)初四年」の「年」字に懸針の勢がないのは、書き始めて気分が厳肅だったためと類推したい。

③石門頌(一四八) 陝西省漢中市博物館

古刻の宝庫、漢中石門の岩壁に刻された摩崖刻石で、現在は岩肌からはぎ取られ博物館内に保存される。銘文は道路工事竣工を記念し作つたもの。長文の言辞中「升」「誦」「陽」等幾つか下垂の筆が散りばめられ、とくに三行目「高祖は命を受け、漢中に興る」のくだりの「命」は、二字分程ボリュームある線で引かれた異色の筆致となっている。

この「年」字に対し例えば鄭君覺は『独笑齋金石文字攷』で、「蓋し国家の景命延長ならんことを頌する意を寓す」といい、文意にのばした理由を求めている。また翁方綱は『兩漢金石記』中、「命字は則ち石紋の断裂をたまたま垂處に當るを以て、下に一字を写すに違あらず。而して上脚を引いて長からしむ。」と、岩肌の裂目を避けるための表現だという。

不思議にも、石門頌では「年」字に垂筆の強調がない。「焉」字についても「以漢詆焉(漢を以て氏とす)や、「行者欣然焉」(行く者は欣然たり)の「焉」には縦画を強調するポーズがあるが、「焉可具言」(焉んぞ具に言う可けんや)の「焉」にはそれが無い。他字の例をみても、文の途中では縦画を長くする表現は抑えられている。文章構成の呼吸と歩を合わせ表現の強弱が織り混ざっていることに注目したい。

④季孟初神祠碑(一五四) 河南省南陽

碑身中央部「穿」の真下、「永興二年」の「年」字をのばすのは、

かなり目立つ表現である。

⑤張景造土牛碑（一五九） 河南省南陽

曹全碑（一八五）を彷彿させる円熟した八分隸で配字も縦横整然と揃う。全文十二行、十行目「府」字の縦画を今まで紹介した筆致とは異り、左へ抜き払い簡牘と近似した用筆法をとっている。一般に、垂直に線を下すより右旋回で筆勢に任せ書き進める方が速記に適していることから、実用書としての簡牘ではこの筆法が多用されたのだらう。慣れた書吏にかかること、引き方に工夫を加えまるで書技を誇るかのようにかなり巧みに、斬新に、ときには塗り込み式に誇張した作も随分ある。書き手の水準を表す一種のデモンストレーション的行為にすら思える。

なおこれら長脚体を示す簡牘の記年は、建碑が流行する以前、後漢極初期までのものが大部分で、時代的には刻石と肉筆とは流行期に矛盾を生じる。ただ、後の時代でも肉筆類は碑刻よりも書体、書風の進化の過程につき一歩先の姿態を表しているのが認められる。この碑でみる「府」字は「府告」として用いられているように、官権の威厳を碑面にまで反映するように、敢えて強調画に作った感が濃い。その抜きはなされた縦線の先端は、貨幣の形に刀状が使用されたのと同じく、刀の切っ先のように尖り、完成された横画上の波磔美と共通する技巧的な質の高さを看取する。

⑥馮煥神道闕 無年月 四川省渠県

神道闕とは祠廟や墓前に位置する左右一对の石柱で、ここでは一石を残すのみ。

⑦沈府君神道闕 無年月 四川省渠県

左右両闕の銘文上方に羽根をひろげた鳳凰が浮刻してある。西闕の「豊」「令」「道」字は、行を仕切る界線を超えてまでのぼしている。東闕の「沈」字の波磔の長さは比肩するものなく、加えて左払いまで大きくのぼした所もある。

懸針・垂露に比べ波磔（波勢）を一気に引くものは顧みられることが少ないが、どちらも書き手が自由に意志的に書き分けた所産で、多岐に及ぶ漢碑の書風でも「一画を弩張するもの」とでも称して分類出来よう。

例えば瓦當文では、円形の縁に沿って文字を歪めながら篆書を図象化し、独特の造形美が作られた。このように材質を巧く利用して特殊な空間を活かそうとした表現は、漢人の貪欲な装飾美を追求した姿勢を最もよく示している。⑥⑦が異常に波磔を強調するのは、瓦當文と反対に広い石面を充実させ、細線ながら銘文の上下左右に立体的に浮刻された紋様に負けないよう大胆に表現した結果に他ならない。それらには単なる遊戯的・作爲的空間処理ではなく、陰に頌徳・紀功等の建立目的上、王侯の存在を民衆に示す手段たる姿勢が内含されていることを見過ごしたくはない。碑刻と簡牘にみる通行体・速写体との差異が、この点にあると思う。

漢代の肉筆資料

一九七〇年代、相ついでまとまった量の重要出土品があった。馬王堆帛書（前二〇六～前一六八）、馬王堆一号墓簡牘（前一六八～前四五）、銀雀山竹簡（前一四〇～前一一八）等が名高い。従来出土品も含め、幾つか参考文献を紹介したい。図書類では、

- ①羅振玉・王国維『流沙墜簡』（京都、一九一四年。一九九三年再版）
- ②勞幹『居延漢簡圖版之部』全三冊（中央研究院歷史語言研究所、一九五七年。一九七七年再版）
- ③甘肅省博物館・中国科学院考古研究所『武威漢簡』（文物出版社、一九六四年）
- ④湖南省博物館・中国科学院考古研究所『長沙馬王堆一号漢墓』（文物出版社、一九七三年）

- ⑤ 銀雀山漢墓竹簡整理小組『銀雀山漢墓竹簡（壹）』（文物出版社、一九七五年）
- ⑥ 中国社会科学院考古研究所『居延漢簡甲乙編』（中華書局、一九八〇年）
- ⑦ 甘肅省文物考古研究所、他『居延新簡上下甲渠候官』（中華書局、一九九四年）
- 邦人編集によるものでは、
- ⑧ 赤井清美『漢簡』全十二巻（東京堂出版、一九七五年）
- ⑨ 宇野雪村『簡牘菁英』（玄美社、一九七七年）
- ⑩ 大庭脩『大英図書館蔵・敦煌漢簡』（同朋舎、一九九〇年）
木簡の概説書としては、
- ⑪ 大庭脩『木簡』（学生社刊、一九七九年）
- ⑫ 大庭脩『木簡学入門』講談社学術文庫、一九八四年）
- ⑬ 林劍鳴『簡牘概述』（陝西人民出版社、一九八四年）
- がある。いうまでもなく大庭氏は斯界の第一人者で他にも多くの著述が知られる。⑬は基本資料目録を付す。
- 最近の研究成果を収録したものは、
- ⑭ 永田英正『居延漢簡の研究』（同朋舎、一九八九年）
- ⑮ 大庭脩『漢簡研究』（同朋舎、一九九二年）
字典、書法に関しては、
- ⑯ 佐野光一『木簡字典』（雄山閣出版、一九八五年。縮冊版あり）
- ⑰ 『簡牘帛書字典』（上海書画出版社、一九九一年）
- ⑱ 鄭惠美『漢簡文字の書法研究』（国立故宮博物院、一九八四年）
最後に国内展覧、訪中報告書について。
- ⑲ 『大英図書館 敦煌・楼蘭古文書展』（朝日新聞社、一九八三年）
- ⑳ 『シルクロードのまもり―中国・木簡古墓文物展―』（毎日新聞社、一九九四年）
- ㉑ 西林昭一『中国甘肅新出土木簡選』（毎日新聞社、毎日書道会、一九九四年）

㉒ 『書のシルクロード』（西域書跡考察団、柳原書店、一九九七年）
右のうち⑲の展示図録には、西川寧氏による篆書・古隸・隸書（八分）・草隸・草書（章草の母体）の概念規定が手際よくまとめられ、㉒には敦煌・居延の現状を伝える写真や西安出土で前漢の紀年のある「骨簽」等新出資料を収録し、巻末に漢簡発掘研究史略年表を付す。

その他・参考文献

- 時代を通観するには、今まで平凡社（注3）や河出書房刊行の『書道全集』が便利だった。例えば平凡社版（一九六五年）第二巻「中国・漢」では、「中国書道史2」（神田喜一郎）、「漢鏡とその文字」（梅原末治）、「漢晋の木簡」（森鹿三）、「碑碣の形式」（水野清一）に続いて「図版及び解説」「書人小伝」「年表」を掲載する。他方、河出書房版（一九五五年）第二巻「漢」には「グラビヤ」「図版釈文及び解説」の他、「漢代の書道」（松井如流）、「中国古代の石刻」（藤田国雄）、「漢隸について」（桑原翠邦）の概説がある。前書は主に京都学派の東洋史学者が、後書は書家の執筆した内容となっている。
- さらに遡り、刊行以来年月が経過し今日では退色した記述があることは免れないが、先人の遺産といふべきものでは、
- ① 中村不折『漢碑之研究 附蔡邕考』（『法帖書論集』雄山閣、一九三五年）
- ② 同 右「漢碑之研究下 碑碣」（同右）
- ③ 藤原楚水著『図解書道史』第一巻（省心書房、一九七一年）
を挙げたい。③は豊富な中国金石著録の言辭を引用した文献資料満載の記述といえる。因みに中国金石著録の中で、とくに漢碑に詳しいものに次がある。
- ④ 翁方綱『兩漢金石記』（二二巻・『石刻資料新編』一一〇所収）

- ⑤馬邦玉『漢碑録文』（四巻・『石刻資料新編』二―八所収）さて、通史を学ぶ上で近年の研究成果を収めたものでは、
- ①『中国美術全集 書法篆刻編1 商周至秦漢書法』（人民美術出版社、一九八七年）
- ②『中国書道全集』第一巻「殷周秦漢」（平凡社、一九八八年）
- ③西林昭一責任編集『ヴィジュアル書芸全集』第二巻「秦・漢1（石刻）」（雄山閣出版、一九九二年）
- ④『中国書法全集』第七・八巻「秦漢刻石卷」（榮宝齋、一九九三年）
- を参照されたい。④は一九七種の刻石と秦漢刻石年表を録す。次に刻石を分類し、まず古隸は、
- ⑤牛丸好一「漢の小隸について(3)―前漢の刻石―」（『書論』第五号、一九七四年）
- ⑥石川九楊『書の宇宙』第四巻「風化の美学 古隸」（二玄社、一九九七年）
- 因みに⑥のシリーズには「書くことの獲得 簡牘」「君臨する政治文字 漢隸」二巻もあり、鑑賞のための手引書として挙げる。古隸といえば、とりわけ石門摩崖が著名である。
- ⑦『文物』（一九六一年四・五期、一九六三年二期）
- ⑧『石門』第一・二・三号（漢中市博物館、一九八四・一九八六・一九八八年）
- ⑨郭榮章著『石門摩崖刻石研究』（陝西人民美術出版社、一九八五年）
- に関連する詳しい論文を掲載し、単行の図録に
- ⑩牛丸好一『漢中褒斜道石門摩崖石刻』（毎日コミュニケーションズ、一九八六年）
- ⑪『石門漢魏十三品』（陝西人民美術出版社、一九八八年）
- などがある。開通褒斜道刻石のみに限っても、
- ⑫『書道』第八巻第十一号（秦東書道院出版、一九三九年）
- ⑬『書品』第三八号（東洋書道協会、一九五三年）
- ⑭『墨美』第七四号（墨美社、一九五八年）
- と古くから特集が組まれ、注目的であった。
- 画像石・博文・瓦當文等に関する書物は中国で地域ごとに編輯され、枚挙に遑がない。四川・山東・河南省のものが多い。
- ⑮周到他『河南漢代画像磚』（上海人民美術出版社、一九八五年）
- ⑯高文『四川漢代画像磚』（上海人民美術出版社、一九八七年）
- ⑰長広敏雄『漢代画像の研究』（中央公論美術出版、一九六五年）
- ⑱『中華人民共和国河南省碑刻画像石』（時事通信社、一九七四年）
- ⑲土居淑子『古代中国の画像石』（同朋舎、一九八六年）
- ⑳伊藤滋『秦漢瓦當文』（日本習字普及協会、一九九五年）
- ㉑西林昭一「字博―秦・漢期―」（『不手非止』第九号 一九八三年）
- ㉒は三百余点の多量を収め、㉑は博文の定義や多様な種類を紹介している。
- なお、画像石のモチーフには当時の人々の生活の情景、風俗、神々の姿が活写されている。絵画協の題字とともに画面を読みほぐす興味を喚起するものでは、
- ㉓林巳奈夫『石に刻まれた世界―画像石が語る古代中国の生活と思想』（東方書店、一九九二年）
- に長年の資料集積に裏付けられたわかり易さがある。
- 漢碑の形状には素朴な方形もあれば、円首や圭首の頭部に朱雀や龍、雲起紋を付刻する例もある。銘文周辺の碑首や左右碑側、そして台座（跌）にみる瑞獸や巧緻な裝飾紋様との関係は、文字同様、時代の写し鏡である。
- ㉔関野貞『支那碑碣形式の変遷』（座右宝刊行会、一九三五年）
- ㉕関野貞『支那の建築と芸術』（岩波書店、一九三八年）
- は碑の起源から螭首・龜趺制の定着する唐代までの形状の変化に言及している。

- 図版の集成として代表的なものには、『書跡名品叢刊』全二〇八冊(二玄社、一九五八〜八〇年)が絶版となった今(注4)、
- ②⑤『中国法書選』全六〇冊(二玄社、一九八七〜九〇年)
- ②⑥『原色法帖選』(二玄社、刊行中・注5)
- ②⑦『書学大系』碑法帖篇五十卷 研究篇十五卷(同朋舎出版、一九八四〜八五年・II期碑法帖篇全二十卷あり・注6)
- ②⑧『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本滙編』(中州古籍出版社、一九八九年)
- ②⑨金石拓本研究会『漢碑集成』(同朋舎、一九九四年)
- ③⑩永田英正編『漢代石刻集成』(京都大学人文科学研究所共同研究報告 同朋舎、一九九四年)
- ③⑪河南省文化局工作隊「河南現存の漢碑」(『文物』一九九四年五期)
- ③⑫『山東秦漢碑刻』(齊魯書社出版、一九八四年)
- ③⑬高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(四川大学出版社、一九九〇年)
- ③⑭『百衲本漢代の隸書』全八冊(天来書院、一九九六〜九七年・注7)
- 等がある。例えば②⑨には(3)石門頌(4)乙瑛碑(5)禮器碑(6)史晨前後碑(7)西狹頌(8)曹全碑(9)張遷碑(10)木簡・竹簡・帛書を収める。②⑥は原帖通りの体裁を複印し②⑦では積文・訓読・口語訳・概観・書法解説を各冊掲載する。③⑭は旧精拓から文字を選び、清雅堂・西東書房・雄山閣をもつ。いわゆる法帖刊行物としては、清雅堂・西東書房・雄山閣出版のものが流布するが特殊なものは、やはり②⑨⑩を参照されたい。
- ③⑪③⑫は地域ごとに碑刻をまとめた例である。研究上、碑の形状が窺える拓本の整本(全套本)を掲載するのは、『書跡名品叢刊』の他、
- ③⑮藤原楚水『増訂寰宇貞石図』(興文社、一九四〇年、国書刊行会復刻、一九八二年)
- の大型本がある。

- 季刊、定期刊行物中、漢碑の特集を組むものも多く、一例としては『書学』第四〇号「孔廟の漢碑」(日本書道教育学会、一九八三年・注8)、『書道ジャーナル』季刊一八号「教則本・曹全碑」(書道ジャーナル研究所、一九九七年・注9)、『書論』第二九号「祀三公山碑」(書論編集室、一九九三年・注10)、『墨』一〇八号「隸書大研究②古隸の世界」(芸術新聞社、一九九四年)等があり、記載内容は各書性格上、硬軟異なるが、よく知られるものを一応列挙した。既に終刊となっていたり、古いものでも見逃せない学術的論考を多く掲載した書物では、『書苑』(三省堂・注11)、『書品』(東洋書道協会・注12)、『墨美』(森田子龍・墨美社・注13)『不手非止』(不手非止刊行会・注14)を挙げたい。
- 漢碑の訳解については、
- ③⑯福本雅一編『中国碑帖選訳注』全三冊(玉林堂、一九八二〜八四年)
- の上巻に石門頌、禮器碑、西嶽華山廟碑、孔宙碑・曹全碑・張遷碑を収録する。ともすれば閑却されがちのこの分野も、しばしば一般誌に個々の碑帖を取りあげてを散見する。②⑤のガイド編にも訳文を収める。
- 続いて、漢代の篆書については
- ③⑰『書品』第八一号「漢碑篆額」(一九五七年)
- ③⑱『秦漢石刻的篆書』(人民美術出版、一九八二年)
- また字典では、
- ③⑲伏見冲敬『隸書大字典』(角川書店、一九八九年)
- ④⑰『中国隸書大字典』(上海書画出版社、一九九一年)
- があり、収載資料目録を完備している。
- 「隸書」への総合入門書では類書が多いが、
- ④⑱西川寧編『書道講座』七「隸書」(二玄社、一九七四年・注15)
- に定本としての充実した執筆陣による内容がみられる。
- 学会の動向で特筆すべきは、一九八九年九月泰安・曲阜におき

「中国漢碑学術討論会」が開催され、日本の研究者も参加した。成果は、

⑫ 中国書法家協会山東分会編『漢碑研究』（齊魯書社出版、一九九〇年）

に収められ、多角的に碑刻を剖析している。国内では歴史研究の分野で、簡牘や漢碑の銘文を中心とする金石資料中の記述を活用した論考を諸本にみる。

漢代の書論で伝わるものは数少いが

⑬ 中田勇次郎編『中国書論大系』第一巻「漢魏晋南北朝」（二玄社、一九七七年）

⑭ 『中田勇次郎著作集』第一巻「中国書論史漢魏晋南北朝」（二玄社、一九八四年）

⑮ 『精萃図説書法論』第一巻「漢魏六朝」（西東書房、一九八八年）等がある。⑮は原文の読解に詳しく⑭では文献による書論の通史が展開され、⑮には書論による書法の紹介を図示しながら行っている。

⑯には「説文解字籒」（後漢・許慎、福本雅一訳）、「非草書」（後漢・趙壹、杉村邦彦訳）を、⑰には「蔡邕書説」（後漢・蔡邕、森高雲解説）、「蔡邕石室神授筆勢」（蔡邕、森素香解説）を掲載する。

また漢代は、書が芸術の一ジャンルとして成立する萌芽期に当たっている。このことを正史その他の文献資料を博搜して論述したものに、

⑱ 杉村邦彦「『書』の生成と評論」（『東洋史研究』第二五巻第二号）

がある。その他、

⑲ 丹羽兌子「蔡邕―文人の原形―」（『書論』第二号所収）

は、後世のいわゆる「文人」の原形を後漢の蔡邕（一三二―一九二）に見出した論考として注目に値する。

付記

法帖影印本につき、本文に紹介した出版社以外のものや個人刊行書の中から、いくつか銘記したい。

① 坂田玄翔、王思礼、頼非編『山東新出土漢碑石五種』（天来書院、一九九一年）

これは竊盜刻石や蒼山城前村漢画像石題記等、漢碑の宝庫ならでの優品を収める。

② 『国初拓漢三老諱字忌日記初拓本 付漢隸四種』（木雞室）
右には主題にみえる刻石の他、萊子侯刻石、魯孝王刻石、陽三老石堂題記、□臨為父通作封記を併収する。印刷も精巧。

③ 『蒼山元嘉元年画像石墓題記』（書声会、一九八四年）

④にも収録されているが、まとまった銘文を有する画像石では注目の遺品。

④ 松丸東魚編『秦漢瓦當選』（白紅社、一九七三年）
松丸氏個人が刊行した法帖叢書の一冊。

⑤ 『漢封龍山碑』（書芸文化新社、一九六一年）

⑥ 『漢禮器碑』（書芸文化新社）

⑦ 『漢乙瑛碑』（書芸文化新社、一九七四年）
三冊ともに飯島春敬氏が刊行した「中国の書道」シリーズ。

⑧ 『古文鐘美』（玄美社、玄美社法書名品選第五集、一九七二年）

⑨ 『漢武梁祠画像題字 吳江陸恢集裝』（玄美社法書名品選、一九七二年）

⑩ 『明拓衡方碑』（玄美社名品選第一期十輯、一九七三年）

⑪ 『旧拓西狹頌』（玄美社名品選第三期三輯、一九七八年）

⑫ 『博瓦當集英』（玄美社名品選第五期八・九輯、一九八六年）

⑬ 『葺拓古博集録』（書学院出版部、一九七七年）

⑭ 『漢郁閣頌』（書学院出版部、一九八〇年）

⑮『陶埴瓦削文字集録』（書学院出版部、一九八一年）
 ⑯『漢祀三公山・三公山碑』（玄美社名品選第六期一輯、書学院出版部、一九八七年）

⑰『漢碑拓本特集』（財・書壇院、吉田苞竹記念会館図録第九号、一九七七年）

書壇院の創始者・吉田苞竹氏の蒐集した拓本の中から選りすぐって展示されたものの図録。

注

1 従来の陶文資料には『秦代陶文』（袁仲一編著・三秦出版社・一九八七年）を参照。

2 例えば「長垣本」を収録した影印本では、『書苑』や西東書房法帖、『書跡名品叢刊』、『季刊書道ジャーナル』（四〇号）がある。

3 平凡社版『書道全集』には所謂「旧版」と称す戦前刊行分がある。第二巻「樂浪・前漢・後漢・刻石文」（一九三〇）、第三巻「漢晋代木簡・其他真蹟・瓦當・埴・印璽・封泥」（一九三一年）。

4 『書跡名品叢刊』に収録されるものは、①袁安碑②乙瑛碑③尹宙碑④夏承碑⑤瓦當⑥開通褒斜道刻石⑦韓仁銘⑧居延漢簡⑨權量銘⑩孔宙碑⑪三老諱字忌日記⑫祀三公山碑⑬嵩山三闕銘⑭西嶽華山廟碑⑮西狹頌⑯石門頌⑰石鼓文⑱埴文⑲曹全碑⑳大吉買山地記⑳泰山刻石㉑張景造土牛碑㉒張寿残碑㉓張遷碑㉔敦煌漢簡㉕帛書㉖鹿孝禹刻石㉗武威漢簡㉘武梁祠画像題字㉙郿閣頌㉚封龍山頌㉛北海相景君碑㉜㉝木簡殘紙㉞孟璇殘碑㉟楊量買山地記㊱楊淮表記、である（五十音順）。

5 『原色法帖選』には禮器碑（東京国立博物館蔵）、曹全碑、張遷碑（北京故宮博物院蔵）、乙瑛碑（同上）の漢碑を収める。

6 『書学大系』にはI期に瓦當、開通褒斜道刻石、石門頌、禮器碑、曹全碑、張遷碑、木簡（二冊）、II期に乙瑛碑、西狹頌、孔宙碑、尹宙碑を収める。

7 『百衲本・漢代の隸書』には禮器碑、曹全碑、開通褒斜道刻石、乙瑛碑、張遷碑、楊淮表記、鮮于璜碑、史晨碑を収める。

8 『書字』にも漢碑の特集が多くみられ、例えば石門頌（三五四号）、史晨前碑（三七六号）、史晨後碑（三八五号）、孔廟禮器碑（四一五・四一六号）、瓦當文（四二五・四二六号）、尹宙碑（四五〇号）、漢隸拾遺（武氏祠石闕銘、衡方碑、孔彪碑）（四五五号）等が近刊にある。特集を組んだものからとくに著名な古典を選び、

『書学名蹟選』とし、韓仁銘、西狹頌、張遷碑等を収めていることを付記する。石橋犀水、藤原楚水、松井如流氏等の解説がある。

9 『書道ジャーナル』には楊淮表記（二五号）、隸書三十体（二九号）、教則本・西嶽華山廟碑（四〇号）、祀三公山碑（一八号）のグラビア特集がある。論考では「古代隸書の主な研究論文と図書」（二九号）等。

10 『書論』には漢碑に関する論考として「漢の摩崖について」（牛丸好一、第一号）、「漢の小隸について(1)(2)(3)」（牛丸好一、第二・四・五号）、「百漢硯碑追蹤」（杉村邦彦、第十四号）、「最近発見された漢唐書道史関係資料」（大庭脩、第十八号）、「文房閑話(4)前漢の王陵塞石刻石」（牛丸好一、第十八号）、「長沙馬王堆一号漢墓出土の文字資料」（片山智士、第十八号）、「祀三公山碑―解題並びに訳註」（藤田高夫、二九号）、「祀三公山碑について―特にその書体をめぐって」（井垣清明、二九号）等が挙げられる。

11 『書苑』には西嶽華山廟碑に関する内容（二一九）、特集として韓勅造孔廟禮器碑（五一四）、漢淳于長夏承碑（五一九）、孔宙

碑(七十一)、西狭頌(七十九)等がある。これら『書苑』に収録する拓本は、中村不折書道博物館蔵品が多い。論考では「支那の西陲に発見された漢晋間の木簡に就いて」(石田幹之助、一一一)、「漢代建碑の流行及び其時世の禁制に就いて」(市村瓊次郎、二一九)、「漢碑に見えたる守令・守長・守丞・守尉等の官に就いて」(濱口重國、七一一)参照。

12 『書品』では漢画像石題字集(二二二号)、楊淮表紀集(二七七号)、祀三公山碑(三十一号)、開通褒斜道石刻(三八八号)、乙瑛碑(五一号)、三老諱字忌日記(五八号)、漢人木簡集・隸書篇(六八号)、封龍山頌(六九号)、漢人木簡集・草書篇(七〇号)、漢碑篆額(八一号)、秦漢瓦當文字(八六号)、未断本曹全碑(八九号)、漢代刻字輒集(九一号)、裴岑紀功碑(一〇六号)、析里橋郟閣頌(一〇八号)、袁安碑・袁敞碑(一一〇号)、安陽漢刻五種(一二八号)、韓仁銘(一二九号)、朝侯小子殘碑(一四〇号)、張壽殘碑(一五二号)、甘陵相殘碑(一五四号)、孟琰殘碑(一六一号)、張景造土牛碑(一二二二号)、四川刻石五種(一一七四号)、光和三公山碑(二〇六号)、校官碑(二二二二号)、馬王堆三号漢墓帛書老子甲本(二五八号)、馬王堆三号漢墓帛書老子乙本(二六四号)、小玲瓏山館本西嶽華山廟碑(二六七号)、銀雀山漢墓竹簡・孫子兵法(二七一号)、銀雀山漢墓竹簡・孫臏兵法(二七三号)、四川犀浦漢簿書殘碑(二八二二号)、武威医簡(二八四四号)、濟寧漢碑(二八八号)、馬王堆漢墓医簡(二九二二号)、漢金文(二九三三号)、樓蘭新出土の木簡殘紙(二九八号)等の特集がある。著名な文物以外にも、主幹西川寧氏の金石趣味が横溢した珍しい資料の紹介、大陸から伝わる新出資料に対応した内容の図版・記事がみえる。一九四九年創刊、一九八九年終刊。

13 『墨美』では博(一七号)、開通褒斜道刻石(一八号)、木簡(五七号)、居延出土の木簡(六七号)、開通褒斜道刻石(七四号)、木簡(九二二号)、石門頌(九六号)、楊淮表紀(九八号)

等が集められている。一九五一年創刊、一九八〇年終刊。

14 『不手非止』には特集・論考に「新・齋平大尹馮君孺人画像石墓の題記について」(西林昭一、五号)、「特集封龍山頌」(六号)、「特集開通褒斜道刻石」(七号)、「新資料紹介鮮于璜碑について」(澤田雅弘、八号)、「グラビア 動物・文字條博」(九号)、「特集秦漢古鉢印選」(十号)、「画像石題記の世界」(西林昭一・十号)等がある。

15 二女社刊『書道講座』は所謂、旧版と称されるものがあり(一九五六年)、「隸書のまとめ方」(川村驥山)等を収録する。